

ケアのレパトリーとしての抗議実践——

フラワーデモ大阪におけるスピーチから

スタンディングへの移行を通じて

神村 覚

本研究は、フラワーデモ大阪を事例として、社会運動における抗議実践の変化を、「抗議レパトリー」と「ケアのレパトリー」という二つの視点から分析することを目的とする。とりわけ、スピーチ形式を中心とした抗議実践から、参加者が沈黙して立つサイレントスタンディング形式へと移行していく過程に注目し、この変化がいかなる要因のもとで生じ、運動にとってどのような意味を持っていたのかを明らかにする。

フラワーデモは、2019年に相次いだ性暴力事件の無罪判決を契機として始まった運動であり、被害者への連帯や司法・社会に対する異議申し立てを目的として全国に広がった。公共空間において性暴力被害を語るという実践は、「語っても否定されない場」を形成する試みであった。一方で、性暴力というテーマを扱う運動では、参加者の心理的・身体的安全性や感情的負荷、実践の持続可能性が常に課題となる。本研究は、こうした課題を、運動内部で実践されてきたケアのあり方に着目して検討する。

理論的枠組みとして、本研究は、Tilly や Tarrow によって理論化された抗議レパトリー論を基盤としつつ、近年の社会運動研究における感情・関係性・ケアへの注目を踏まえる。とくに Reed が提起した「ケアのレパトリー」概念を援用し、運動内部で行われるケアを、抗議を支える外部的要素ではなく、選択・配分される実践の一形態として捉える。Reed は、ケアを「生存」「変容」「包摂」という機能に整理すると同時に、ケアが常に肯定的に作用するとは限らず、感情的消耗や役割の固定化といったリスクを伴うことを指摘している。本研究は、この枠組みを使いフラワーデモ大阪の実践の分析を行う。

分析対象として取り上げるフラワーデモ大阪は、2019年5月の初回開催以降、同一の主催者を中心に継続して実施されており、スピーチ期からサイレントスタンディング期への移行を経

験している点で、抗議レパトリーの変化を時間軸に沿って検討することが可能な事例である。研究方法としては、主に主催者および参加者6名への半構造化インタビューの質的分析である。

分析の結果、スピーチ期のフラワーデモ大阪は、性暴力被害の経験を語ることを中心とした「語りの場」として機能しており、参加者にとって「否定されない」「安心できる」セーフスペースとして意味づけられていたことが明らかになった。スピーチは、主張や意見表明というよりも、切迫した経験を語らずにはいられない実践として現れ、被害の存在を公共空間で可視化する役割を果たしていた。

しかし同時に、こうした実践は、語り手に強い感情的・身体的負荷を課し、聞き手や主催者にも受け止めや場の維持に関するケア負担があった。とくに、スピーチを担う特定の参加者に負荷が偏ることで、感情的消耗や参加の継続困難といった問題が生じていた。こうした状況は、Reed が指摘する「変容の収奪」や「病者役割の規範」とも重なり合うものであった。

サイレントスタンディングへの移行は、このようなケア負荷を調整し、再配分するための実践的判断によるものとして理解できる。スタンディング形式では、「語ること」や「代表すること」が抗議の成立条件から部分的に切り離され、参加者は全員が沈黙して立つことによって抗議に関わることが可能となった。これにより、参加のハードルが引き下げられ、運動を続けられる範囲に再設定することが可能になっていた。

本研究は、この変化を抗議の後退や縮小としてではなく、運動内部におけるケアの再編として位置づける。抗議レパトリーの変化は、新たな戦術の獲得に限られるものではなく、引き受ける役割や負荷をあえて減らす選択としても生じうることを示している。フラワーデモ大阪の事例は、抗議実践が、政治的主張の強度だけでなく、参加者の身体性や感情、ケアの配分によっても規定されていることを明らかにするものである。

以上より、本研究は、社会運動における抗議レパトリー論にケアの視点を導入することで、抗議実践の変化を、運動内部の持続可能性や参加条件の組み換えとして捉え、レパトリー論に貢献するものである。